

組 織 と 個 人

(部員減少の背後にあるもの)

田 中 勝

「探検」という言葉は、ある者にとっては、魅惑的な夢の国を連想させ、また他の者にとっては倦怠を起すことがよくあたりまえのような機械文明的な、規則正しい歯車的生活からの脱脚としての唯一の出口のように思われるであろう。現代のような時代こそ、気だるい夢の生活を捨て、汗と血によってのみ得られる冒険を、求めているのだ。そして実際のところ夢を求めて、探検ないしは冒険を志す者が、入部する。その数は、決して多くはないが。……

部員減少の問題は、組織的探検を成さんとする探検部において致命的な事であろう。新人のうち半分以上が、その年のうちに、探検部を去ってしまう。多くの仲間が、もはや探検に情熱をなくし絶望の人となって我々の前から通り過ぎる。我々は、ただ黙って、それを見ている。私自身、実際漫然とした感じでもって「探検」という言葉に引かれてはいるが、こうした生き方、あり方が、他のどのものよりも優れているとは言うことができない。新人は数少なく、そのうえ様々な理由でやめてゆく。

探検部を去る者は、いったい如何なる原因でやめていくのか。個人と組織の問題に悩み、暇がつぶされ、遊ばれない。彼らの多くは、「探検」はひとつのレジャーとして見ており、探検部は、そういうレジャー以上の意識を彼らに要求している。これが、彼らが悩む矛盾の発生源である。手取り早く遊ぼうと思えば、現代社会には、ありあまる程のレジャーがあるから、そういった矛盾を

もってまで、探検部に残ろうとはしないのだ。避けられるべき苦悩は極力避けなければならないかもしれない。個人は、組織を嫌う。現代のような柔軟社会（即ち、個人の自由と権利と生活が保障されている社会）においては、なおさら、他人のことなど考えてはおられないのだ。しかし、我々が少なくとも積極的意味をもって生きようとするならば、もっと日常における自分自身のおかれている社会的、乃至歴史的立場を、はっきりと自覚せねばならない。だけど現実には、われわれは、「探検」を考える余り、世界の苦悩に顔をそむけている一見平和な社会に批判もなく生きているのかもしれない。探検部を去る者が、そうであると同様、我々もまた無関心な個人主義者の部類なのかもしれない。

「探検」を志すということは、一体、何なのかと時に考える。我々が、この世界の現実背に背をむけて、なおも、自分たちの夢を、むさばるというのなら、おそらく我々の社会における存在は無であり、かなり有害(?)であろう。もっと我々は批判的にならなければならない。

探検部を去るものも、そして我々も、忘れてはならないことは「探検」というものによって現実社会から逃避することを望むことは、まったく無意味であることだ。日常生活からの脱却などという言葉はやめよう。我々は「探検」を志すと同時に、社会を批判的に見て行かねばならない。そして「探検」によって犠牲にしている多くの事があるのを自覚せねばなるまい。

そして彼らの苦悩は続く。「探検」は、夢からさめた時、とりとめもない海の深みへ彼らを引きずり込む。即ち、「探検部」を続けていく時の自分の生活の意義を見失うことがあるからだ。私は思う。自分の今までやってきた事の客観的な、一般的な高さを問題にするのではなく、自分の本質、自分に賦与されたものを、生活と行為の中で、できるだけ完全に、純粋に表現してゆくことが大切なのではないか、と。

しかし、個人と組織の問題は、さらに複雑だ。組織は、個人をその一部としての地位に、あてはめようとする。もし我々が自由を大気として呼吸して生きてゆこうとするのであれば、その組織化は、さわめて多くの矛盾を、引きおこすであろう。

そうでなくても、各人は各人の世界観、人生観を持っているから、同一の探検を志すことは、個人と個人との妥協が前提となる。畢竟、人は誰でも自分の世界を持っていて、それを他の人と共に

することはできない。

このように個人と組織とは、水と油のように混りあわないものかもしれない。しかし「探検部」を、成立せしめるためには、個人の意見を十分に組織の運営のうえに、反映させること、それを十分に受け入れる組織であること、が必要である。

少なくとも、これらの「探検部」の組織には、新人の意見を十分に、発表し、部員相互の意志の疎通が、行えるような、リラックスした場が必要である。そして、その場こそが、すべての会議に優先した場であるべきである。新人の胸中には、「探検部」という組織が、O・Bと、執行部によってのみ、どこか分からぬところへ行ってしまうような不安があるのだ。こうした不安が、組織への不信感へととなって行くように思える。

新人と言えど、「探検」と「組織」に対し、批判的態度を常に持つことは、「探検部」の発展にとって無くてはならないことだと思う。

山ぐるい，山ぐるい

倉 谷 明 子

今日も、私の両肩から大きくはばかり出ているザックを背負って家を出る。母のあきらめ顔と、世の人々の、まるで奇怪な物でも見るような視線を受て、居直って街中を歩いてやる。私は山に行くのです。

4月の末に入部して以来7ヶ月、入山日数も70日を越えようとしているんだなと思いつつ、その

時の早さに、あらためておののく。母にいわせると、私は山キチガイの域を脱したそうである。もう山バカ、もしくは山アホの境地であるらしい。この頃は、私に山を教えた叔母までが電話口でぼやく始末。事実、私にだって予想できなかった。これほど山狂いになろうとは。絵が好きで、歌うことも大好きな母がそう願っていたような普通の